

多動的な自閉スペクトラム症児への 身体を通した早期の発達支援に関する実践研究

小野和女 (刈谷市立刈谷特別支援学校)

森崎博志 (愛知教育大学特別支援教育講座)

要約 本研究では、自閉性と多動性を併せ有する幼児Aに対する発達支援の手立てとして動作法を適用するとともに、通園施設での参与観察による実態把握も行い、日常での活動及び訓練場面での様子を捉えていくことで、支援の手立て及び援助者の関わりの在り方について検討することを目的とした。1年9ヶ月の実践の結果、訓練場面においては目が合う頻度が増える、支援者に合わせて動作課題を行うことができるなどの変化が見られ、生活場面においても周囲の様子を見て行動することができるようになっていった。注意や動きを共有することを通して、動作法による実践が行動の自己調整力や対人的な認知力を育む効果が期待できることが示唆された。また、対象児と日常の活動の中で関わることは動作課題及び動作法実践における関わり方の様式に生かすことができることが示唆された。

キーワード：動作法、自閉スペクトラム症、多動性障害

I. 問題及び目的

大六(2017)は自閉スペクトラム症児について、共同注意に困難を示し、言語獲得や他者の心の理解、常識的知識の習得の困難へと発展すると述べている。また、多動的な子どもにおいては、その行動特性から社会への適応に困難さがあると言われている(村上,2017など)。自閉スペクトラム症児の症状は様々であるが、特に軽度症状がある子どもは周囲から見て症状がわかりにくいいため、生活の中で失敗や挫折を繰り返す例も少なくなく、これによって精神症状や身体症状の異常などの二次的な問題に発展する可能性がある。これらのことからしても、自閉スペクトラム症児の療育においては、他者の心の理解や社会的常識、また、それらとも関連の深い対人的な能力の発達が大きなテーマであると言える。

笹森ら(2010)も述べているように、自閉的・多動的な傾向がある配慮児が就学前の段階において、幼稚園、保育所ともに高い現状がある。先に述べたように、自閉スペクトラム症やADHD等、発達障害及びその特性がある子どもたちは周囲に症状の理解がされにくく、のちに社会への不適応、自己肯定感の低下、非行などの二次的な問題に発展する可能性が高い。そのため、社会生活への適応を考えていく上で、より早期の発達支援が強く望まれる。

動作法は当初、脳性まひ児の運動障害の改善を主な目的として実践されたが、自閉的な子どもや多動的な子どもに対しても実践が試みられ、その有効性が報告されるようになっていった。森崎(2009)は、自閉的な子どもに対する動作法のねらいは、「身体的な相互交渉を通して行動の自己調整力と他者認知(他者と注意を共有し、他者の存在を実感する力)を育むこと」であ

ると述べている。

しかし、その一方で、森崎(2007)は、就学前の通園施設においては動作法の専門的な知識や経験を有する職員は非常に少ない現状があることを指摘しており、通園施設や家庭においても簡易に動作法を実施し得るような動作課題の工夫(アレンジ)や、実践を行う上で子どもへの関わり方についても検討を進める必要があると述べている。

また、自閉的な子どもへの動作法の実践においては、訓練場面だけではなく日常生活の様子を捉えていくことが大切であることは言うまでもない。しかし、従来の動作法の実践研究においては、日常の行動の様子について一定の考察はなされているものの、研究者自身が実際に日常での活動に関わりながら対象児を参与的に観察した例は非常に少ない。

そこで本研究では、自閉性と多動性障害を併せ有する幼児Aに対し、援助者と視線(注意)及び一定の動きを共有していくことで、他者認知や自己調整の力を育むことを目的としながら動作法による実践を行い、その意義について検討する。その際、援助者自身が通園施設の日常の活動にも定期的に参加する機会を設け、参与観察による実態把握も行う。そして、訓練場面と日常生活での行動の変容、それに伴う心理面の変化について事例を通して検討し、支援の手立て及び援助者の関わりの在り方について検討する。

II. 方法

1. 対象児

A(開始時3歳7ヶ月)

主障害は自閉スペクトラム症、多動性障害。こども発達支援を行っている通園施設に在籍。

<インテーク時の様子>

- ・落ち着きがない。
- ・会話が成立しにくい。
- ・言葉の指示が入りにくい。
- ・常に走り回っている。
- ・集中の持続時間が短い。
- ・納得いかないことがあると泣いて怒る。
- ・欲求や気持ちを行動で示すことが多い。

2. 手続き

20XY年4月～20XY+1年12月まで(1年9ヶ月)、50分を1セッションとする動作法を週に1回実施する。発達の指標として定期的に「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査」、「小児自閉症評価尺度(CARS)」を実施する。行動・心理面に関しては、訓練記録と園の日常生活の記録の他、月2回ほど園の活動の参与観察を行い、行動を記録する。

<主な動作課題>

<躯幹ひねり>

臥位で腰を固定し、肩や胸周りを大きく開くように動かし、肩の力を抜く。

<腕上げ>

臥位でTrと対面し(目を合わせるように)、Trに合わせて腕をゆっくり上下に動かす。

<座位>

前屈(股関節の弛め)、背そらせ(肩や上体の力を抜く)で力を抜き、続けて座位姿勢を真直ぐに保持する。

<中間位>

片膝立ち、膝立ちの姿勢保持と重心移動。

<立位>

片足立ちでの姿勢保持や、Trと正対し動きを模倣する模倣動作を行う。

Ⅲ. 経過及び考察

1. 各期の姿勢・運動面と心理面の変化

●第1期:#1～#11(20XY年4月～20XY+1年2月)
—訓練の始まり—

第1期の主な訓練目標は以下の通りである。

- ・訓練に集中して取り組む
- ・Tr(援助者)と一緒に訓練をする
- ・Trの指示を聞いて訓練をする

Aが初めて動作法に取り組むということもあり、Aができることや課題となる点を訓練の中で確認し、SV(スーパーバイザー)と相談をしながら長期的目標を決めた時期であった。まずは活動に参加すること、一人で自分のやりたいように進めるのではなくTrの指示を聞いて一緒に訓練に取り組むこと、5分間でも10分間でも自己の身体に意識を向け、集中することを主な目標とし、模倣動作、膝立ちを中心に動作課題に取り組

んだ。

姿勢・運動面

<躯幹ひねり>

ゆったり落ち着く感覚を体験すること、Trが弛めたい箇所を意識して身体を動かすことを目標とした。はじめは指差しや「こっち」などの抽象的な言葉の指示に対する反応が鈍く、人や物の場所を尋ねて身体の向きを変えるよう促すと指示が通りやすかった。表情は落ち着いており、集中している様子も見られたが、2、3回繰り返そうとするとすぐに起き上がってしまうことが多かった。

<腕上げ>

Trと息を合わせて手や腕を動かすこと、Trと目を合わせることを目標とした。はじめはTrと手を合わせた状態で腕を動かすことが難しく、まずTrの手にタッチすることから始めた。訓練に慣れてくると、落ち着いた状態で手を合わせて動かすことができるようになってきた。声をかけると目が合うことがある。

<座位>

Trの指示や補助に応じて動作課題を行うことを主な目標とし、前屈では股関節を折るようにして力を抜くこと、背そらせでは上体(肩)の力を抜いてTrに身体を預けることをそれぞれの動作課題の目標とした。言葉の指示のみで座位を取ることや、座位のままじっとしていることが難しい。前屈では上体を倒したあと、Trの制止を聞かずにそのままうつぶせになってしまうことが多く、背そらせではすぐに上体を前に戻したり、後ろに勢いよく倒れてきたりすることが多かった。

<模倣動作>

Trのカウントに合わせて姿勢を保持すること、Trの姿勢を見て姿勢を模倣することを主な目標とした。Trのカウントを聞いて、片膝立ちや膝立ちの姿勢を多少は保持することができたが、Trの方はあまり見ておらず、実質的に模倣にはなっていない。膝を突っ張るように立っていたり、片方の軸足側に重心がかかった状態で、姿勢が傾いていた。身体に密着した状態で補助しようとする逃げようとする事が多かった。

心理面

はじめは場面の切り替えに難しさがああり、動作法の時間になっても全体の挨拶に参加できないことが多かったが、期の後半になると時計を見て自分から訓練室に入ることが少しずつ見られてきた。また、目から入る刺激に対してとても敏感なため、当初は(大きい訓練室ではなく)人数が少ない畳の部屋で訓練を行うことが多かったが、後半になるにつれしだいに人数が多い訓練室でも取り組めるようになっていった。11月ごろからTrが話しかけたことに対して返事をする様子が見られ、ちょっとしたやり取りが少しずつ増えていった。

座位で硬さのある部位を弛めるなど、じっくり取り

組む弛め課題は苦手だが、姿勢保持などカウントがあり見通しが持てる動作課題については取り組むことができる。日常生活の記録でも、「集団活動に落ち着いて参加できるようになってきた」、「自分から友達に関わることが増えてきた」、「場面の切り替えができるようになってきた」など、第Ⅰ期を通して終盤には、対人面や情緒面での変化が少しずつ見られ始めた印象である。

●第Ⅱ期：#12～#20(20XY+1年4月～7月)

一情動の落ち着き、やり取り感の芽生え

第Ⅱ期の主な訓練目標は以下の通りである。

- ・訓練に集中して取り組む
- ・Trとやり取りをする
- ・ゆったりと落ち着く

Aが動作法の動作課題に慣れ、一人で進めたがることが増えたが、Aの要求を汲んだ上でTrが提案をすると承諾することが多く、相手と落ち着いて交渉ができるようになってきた印象。また、座位や臥位でじっとしている時間が増え、膝立ち、片膝立ちでゆっくり身体を動かす動作課題にも（集中して）取り組めるようになるなど、（落ち着き、集中など）情緒の面で変化が見られた時期となった。

姿勢・運動面

< 躯幹ひねり >

目標は第Ⅰ期と同様に、ゆったり落ち着く感覚を体験すること、Trが弛めようとする箇所を意識してゆっくり身体を動かすこととした。指差しや「こっち」という指示に反応し、自ら側臥位を取ることが出来るようになった。Trの表情や声色に反応して気持ちを切り替えるなど、Trの方へ意識が向けられるように感じられる場面が増えてきた。初めは肩に力が入り硬さが感じられることが多いが、取り組んでいくと落ち着いて力を抜くことが出来るようになる。

< 腕上げ >

第Ⅰ期と同様に、Trと息を合わせて手や腕を動かすこと、Trと目を合わせることを目標とした。訓練の流れが分かってきたということもあり、自分のペースで動かしたがるが多くなってきたが、Trの働きかけでペースを調整することができる。第Ⅰ期よりもTrの方を見る頻度が増えた。ゆっくり動かす際は手をよく見て集中し、速く動かす際はTrと目が合っていることが多かった。

< 座位 >

第Ⅰ期では言葉の指示のみで座位を取ることや、座位のままじっとしていることが難しかったが、第Ⅱ期では座位の動作課題に取り組むことが出来る時間が増えた。背そらせの際にTrに身体を預けることが出来るようになった。しかし、前屈の際は上体を倒してすぐに起こすことが多かった。あぐら座の状態で背筋を伸

ばすよう指示をすると肩に力が入り背中が反ることもたびたび見られた。

< 片膝立ち・膝立ち >

姿勢保持だけでなく、膝立ちや片膝立ちという中間姿勢での重心移動など、踏ん張りながらゆっくりとした動作をする動作課題にも取り組むことが出来るようになってきた。（動作課題の難易度が上がり）膝立ちで腰（股関節）が前に突っ張り、お腹が出た状態になりやすい。腰を後ろに落としていく際に上体や肩に力を入れて動かそうとする。片膝立ちでは軸足と出し足が外側に開き、軸足側がつま先立ちの状態になってしまうため、修正しようとする前に倒れそうになる。重心移動の際はどンドン前傾になってしまう。Trが補助しようとする逃げの様子も見られた。

< 模倣動作 >

片膝立ち・片足立ちでの姿勢保持、立位で膝の曲げ伸ばしを主に行った。一人でカウントを進めたがるが多かったが、Trの指示やカウントの間をよく聞いて調整することが出来た。重心移動の際も自分のペースで動かそうとすることがあったが、Trが「見て！」と指示をするとTrをよく見て動きを合わせる（動作模倣）が出来てきた。

心理面

園での活動で、歌の際に先走って歌ったり、興奮してTrに飛びついたりするなど、興奮した際の行動調整の面にはまだ課題があるが、全体での始めの挨拶の時間になると自分から訓練室に入ったり、訓練の合間に少し休憩をはさんでも訓練に戻ってくる事が出来るようになったりと、場面の切り替えが以前に比べて比較的スムーズにできるようになってきた。動作課題の際に過度に（肩に）力が入ったり、動いたりする傾向があるが、Trの指示を聞いて修正しようとする様子も見られている。第Ⅰ期では集中が切れてくると部屋から出ようしたり何も言わず遊び始めたりすることが多かったが、自分から「疲れた」、「休憩したい」とTrに言葉で伝えることが出来るようになってきた。訓練の流れを理解しており、自分のペースで動作課題を進めたがったり、動作課題に対して要求をしたりすることも増えたが、Aの要求を一旦承諾した上でTrから提案をすると納得して動作課題に取り組むことが出来た。目が合う頻度も増え、落ち着いて言葉でのやり取りができるようになってきた。日常生活の面でも、相手に気持ちを汲み取ってもらったり、自らクールダウンしたりすることで切り替えができるようになってきたこと、落ち着いて言葉のやり取りができるようになってきたこと、周りを見て行動できるようになってきたことなど、行動の変化が見られた。

●第三期: #21 ~ #31(20XY+1年9月~12月)

一やり取り感の高まり一

第三期の主な訓練目標は以下の通りである。

- ・Trの意図に合わせて行動する
- ・Trと動きを合わせる
- ・集中して訓練に取り組む

Aが動作訓練の流れを理解していることから自分一人で進めたことが多くなり、Trが主体になるとふざける様子もしばしば見られるようになった。しかし、腕上げの際に緩急をつけるなど動作課題に工夫をしたり、「今はお姉さんと一緒にやる」など、その都度言葉で何が正解であるかを示したりすることによって、徐々にTrの意図を汲もうとする姿が増えていった時期であった。

姿勢・運動面

< 躯幹ひねり >

動作課題にじっくりと取り組むことが出来る時間が延びたこともあり、腰や肩の硬さに気づき、多少気にかかるようになった。

本人が「硬い」と呟くこともあり、自分の身体の状態への意識が芽生え始めたものと考えられる。また、動作課題の流れを理解していることから、一人でやっていたがったり、ふざけてわざと肩に力を入れたりすることもあったが、Trの提案や指示を聞くと動作課題に取り組むことができた。

< 腕上げ >

第二期と同様に自分のペースで腕を動かしたがることが多く、「ゆっくりできない」とTrに訴えることもあったが、本児の要求を汲んだ上で提案をすると了解することが出来た。前半は、手のひらを合わせて腕上げしようとしても「のりがついてないから」と言ってTrの動きに合わせて手のひらを離してることが多かったが、後半は緩急をつける、手を持った状態で行うなどの工夫をすることでTrの動きに意識が向き、動きを合わせることが出来てきた。また、後半では、役割交替を取り入れ、Tee(本児)がリードする形で動作課題を行うことを試みた。その際は速く動かしたがるが多かったが、「ついていけないよ」、「ゆっくりがいいな」とその都度伝えると、セッションを重ねるごとに速度が緩まり、Trの指示に応えようとする姿が見られてきた。また、Trから促さなくてもTeeの方からTrの目を見るような場面も見られてきた。

< 座位 >

ブロックを嫌がることもあったが、第二期のときよりも背そらせの際にすぐに上体を預けることが出来るようになった。前屈の際には、お尻が床から浮くことが多く手の補助のみで戻そうとしても力が入って初めは難しかったが、「お尻は床につける」とTrが言葉で指示をすると直そうとする様子も見られるようになり、Trの言葉に耳を傾けて動作課題に取り組もうとする姿

が見られてきた。

< 片膝立ち・膝立ち >

第二期ではTrが補助しようとする逃げの様子が見られたが、事前に「お姉さんとやるよ」と伝えるとTrの補助を受け入れられることが増えた。第二期と同様に膝立ちでの重心移動の際は上体の力で動かそうとしたりお腹が出たりするが、Trが股関節を折るように補助をすると、Trの補助に合わせて動かそうとし、補助をやめた後もお腹が出にくくなってきた。

片膝立ちも第二期と同様に軸足と出し足が外側に開き、軸足側がつま先立ちの状態になるので、修正しようとする前に倒れそうになるが、Trの指示や補助に合わせて姿勢を修正しようとする姿も増えてきた。

< 模倣動作 >

初めはTrではなく自身の身体や下の方を見て行うことが多かったが、後半になるにつれて自分からTrに正対した状態で取り組むことが出来るようになってきた。カウントが増えるにつれて集中がそれていくことが多かったが、Trが声をかけると向き直ることが出来てきた。

心理面

動作訓練の流れを理解していることから、第二期よりも自分主体で進めたい傾向が強くなったが、Aの要求を汲んだ上でTrの要望を伝えると納得して取り組むことが出来る。また、Trの話を聞く前に一人で動作課題を始めることもあったが、「こうした方がかっこいいよ」、「これができたら100点だよ」と伝えるとそれに合わせてその都度修正することができた。ブロックや補助を拒否することもあったが、事前に「お姉さんとやる」と伝えると受け入れられることが多く、後半には事前に伝えなくても補助を受け入れられることが増えた。また、当初は訓練中に仲の良い友達が遊んでいるのを見ると一緒に遊び始め、そのまま遊んでしまうことが多かったが、友達が動作課題に取り組んでいるところを見て「僕もできる」と言って取り組み始めたり、「Aくんもやろう」と誘うと(切り替えて)一緒に取り組み始めたりすることが増えた。第三期からは徐々にA自らTrの目を見る頻度も増え、会話の際にも目を合わせてくる頻度が増えた。日常生活の様子では、興奮した際に注意が耳に入らなかったり、物を投げたりするなどの行動もまだ見られるが、第一期、第二期に比べると情緒の調整面での問題点の報告が少なくなってきた印象である。分からないことがあった時に大人に聴く、友達と声をかけ合いながら廊下を歩く、自ら感謝(ありがとう)や謝罪(ごめんなさい)の言葉を発するなど、対人的な面での成長や、他の幼稚園との交流保育の際にも楽しく集団活動に参加することが出来たこと、お楽しみ会の練習や誕生日会に最初から最後まで(席を立たず)座って参加出来たことなど、日常での活動においても落ち着いて集団行動を取る様子が

多く見られるようになってきた。

2. 発達検査にみられる変化

表 1

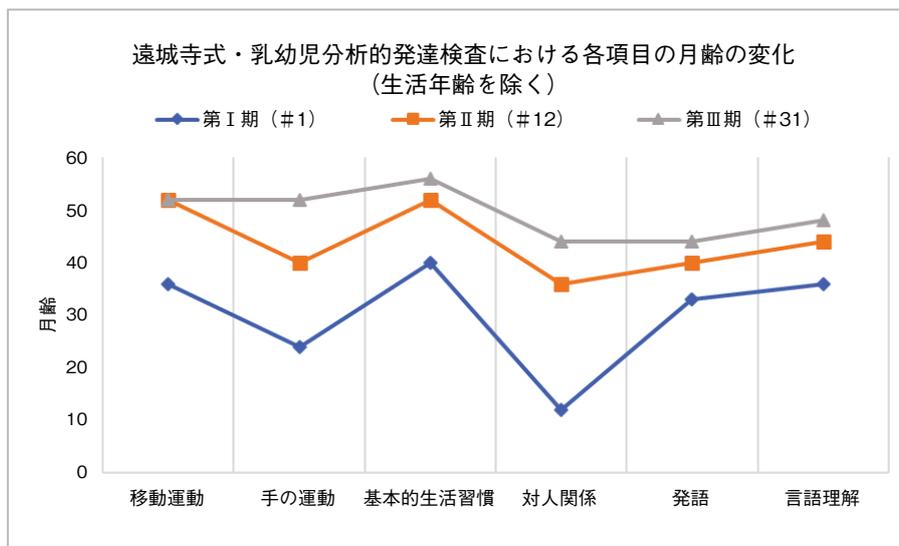
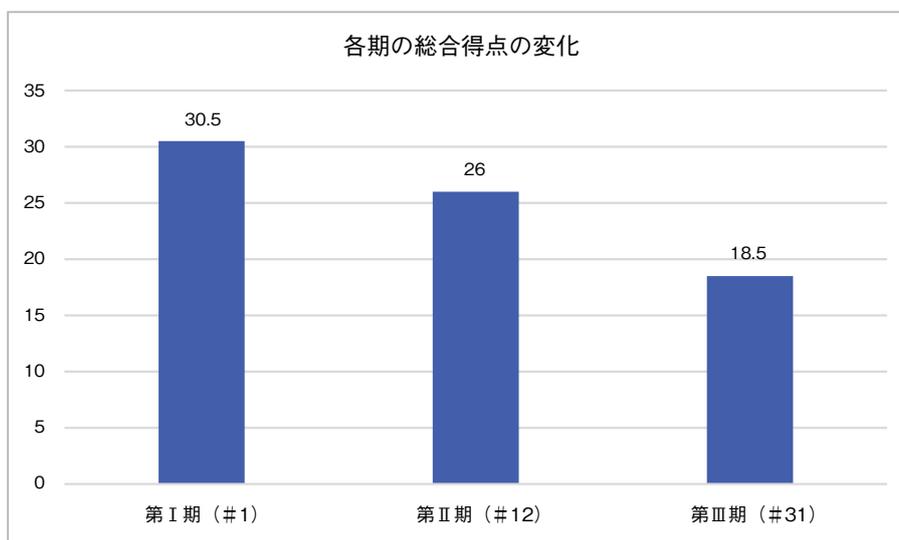


表 2



「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査」表 1

「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査」においては、第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけて、全体的に良好な変化が見られるが、特に対人関係の項目において大きな変化が見られている。

経過の中でも示したように、他者と目を合わせる事がしだいにできるようになり、そして、他者に注意を向け、他者とのやりとりが展開する様子が、訓練場面、日常での活動場面においてしだいに見られるようになってきた。「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査」の結果にもそのような対人的な面での発達が表れたものと考えられる。

「小児自閉症評定尺度 (CARS)」表 2

「小児自閉症評定尺度 (CARS)」においては、Ⅰ期からⅢ期を経て大きく変化があり、自閉的な傾向がしだいに軽減していったことが示された。

「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査」のところで述べ

たように、この点についてもやはり対人的な面での発達的な変化が自閉性 (得点) の低減につながったものと考えられる。

IV. 総合考察

1. 全体的な行動の変容

動作訓練の開始当初、A は全体的に落ち着きがなく、他者の存在や意図、周囲の状況に気づきにくい様子であった。Ⅰ期の後半からは、促すと目が合う場面なども徐々に見られてきたが、全体としては自分の思うままに過ごしたいという気持ちが行動や言動に表れやすい印象であった。

Ⅱ期の前半は、どの動作課題においても促すまで Tr の方には注意が向かず、とりあえず声かけに合わせるという印象が強かった。しかし、後半からは A から Tr の顔や目を瞬時的に見ることや、3 秒間ほどジーっと目が合うことも見られるようになってきた。日常場面

においても、目からの刺激に左右されにくくなり、自分の要求を言葉で伝える、許可を求める、ということができるようになるなどの変化が見られてきた。

Ⅲ期では、前半は自分のペースで訓練を進めたが多かったが、後半からは Tr に合わせて取り組む場面が増えてきた。また、膝立ちや腕上げの際などに、A 主体で身体を動かす場面でもゆっくりと動かすことができるようになった。さらに、腕上げや模倣動作でも Tr と目が合うことが増えてきた。日常場面においては、A の行動が全体的に落ち着いてきたことから、10 月末以降担当職員をつける必要がなくなった。また、段ボールの積み木で友達と一緒に作る、他の幼稚園との交流保育の際に周りが片づけ始めたことに気が付き自ら片づけを始めるなどの様子も見られた。

3. Tr の働きかけとの関連について

I 期においては、A が応じることができる範囲で動作課題を行うことを意識した。長くじっくり取り組むことにこだわらず、A のペースを優先して行うようにして訓練を進めた。I 期の後半からは動作課題や Tr の指示にある程度応じることができるようになり、A のできる範囲から訓練を進め、少しずつ Tr と身体を通してやりとりをする機会を作っていたことが A との良好な関係作りにつながっていったものと考えられる。

Ⅱ期からは A が 1 人で動かしたがる頻度が増えたことや言葉の指示に応じることができるようになったことを受け、Tr へ注意を向けることや Tr と動きを合わせるなど、動作課題の中で A に求めていることを繰り返し伝えていくことを心がけた。さらに、日常生活の参与観察の際に、活動の目的や楽しみのために行動が機敏になる様子を見て、訓練に役割交代を導入した。前半は天井や手を見るのがほとんどであったが、後半からは徐々に Tr の目を見る頻度が増えていった。また、Tr の働きかけに応じて動きを合わせようとする場面が多く見られてきた。このことから、Tr の能動的な関わりと、A の要求を受け入れ役割交代（他者認知の深まりにつながる）をしながら訓練を進めたことが、A の行動に影響を与えたものと考えられる。

Ⅲ期は A が動作課題の内容や手順が分かり、Tr の指示を聞く前に自分のペースで進めようとするものが多くなったため、「相手 (Tr) と一緒に進める」ということを言葉で伝えていくように心がけた。また、腕上げや片膝立ちなど、他者認知・自己調整の深まりをより意識しながら動作課題を絞って行うよう切り替えた。その結果、動きを共有していく中で A とのやりとり感がさらに増すようになり、腕上げの際にも A が自ら Tr の顔を見る頻度が増えた。日常生活でも自由行動の中で友達と協調しようとする姿が見られるようになったり、友達が自分の近くでしていた会話に自分から関わったりする様子など、行動の変化が見られた。

活動を通して感じられることは、やはり、しだいに A が人に対してよく注意が向くようになっていったことであり、加えて人とのやりとり感がしだいに高まっていったことである。また、行動も自分のペースだけではなく、相手や周囲に合わせて行動を収められる（調整できる）という面も見られている。これらは先行研究においても示唆されているように、一つには能動的に注意の共有を重ねて行く働きかけの継続が他者存在を捉える力を育み、他者とのつながりを形成し、他者とのやりとりを展開していくことへとつながることを示すものと言える。また、援助者に合わせながら一定の動きを通した行動の調整の継続が、日常場面での自身の行動を収めていくことにつながることを示すものであると考えられる。

本実践においては、訓練場面だけではなく、園での日常的な活動にも定期的に加わり、A 児の様子を観察する機会を設定した。このことにより、日常での A 児の行動をより詳細に捉えていくことができ、動作法での訓練場面の中で見られた変化とのつながりについて気づきを得ることが多くあった。そして、日常での行動の様子や行動の変化を踏まえて、動作法での働きかけの工夫にもつながった面も少なくない。このような自閉的なタイプの子どもにおいては、動作法を通した関わりと日常での行動の様子、双方についてより詳細に捉えていくことが必要であり、その上でそれらの関連性についても踏まえながら働きかけを工夫していくことが実践の内容や経過に大きな意味を持つものであると言える。

引用・参考文献

- 久保山茂樹・小林倫代・後上鐵夫・笹森洋樹・澤田真弓・廣瀬由美子・藤井茂樹 (2010) 「発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と動作課題」 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 37, 3-15.
- 大六一志 (2017) 「発達障害の理解と支援」 *Audiology Japan*, 60(5), 258-259.
- 村上佳津美 (2017) 「特集: 心身医学の臨床における発達障害特性の理解 注意欠如・多動症 (ADHD) 特性の理解」 *心身医学*, 57(1), 27-38.
- 森崎博志 (2007) 「自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究Ⅱ—通園施設での取り組み—」 *障害者教育・福祉学研究*, 3, 47-56.
- 森崎博志 (2009) 「自閉症児への動作法—論理的背景と基本的な手続きについて—」 *治療教育学研究*, 29, 19-26.